

中国語を母語とする日本語学習者の句読点使用に関する研究

佐々木良造・薄井良子（関西学院大学日本語教育センター）

This study presents the findings of a survey on the usage of Japanese punctuation by native speakers of Japanese and Chinese learners of Japanese. The results revealed significant differences between the two groups. These differences can be attributed to the differences in the definitions of Japanese sentences and Chinese sentences, as Kitamura (1995) has pointed out. Further, the results did not indicate a significant correlation between the responses of higher and lower level Chinese learners and learning history and level of Japanese. Hierarchical cluster analysis was used to examine the tendency of responses. Accordingly, native speakers of Japanese and Chinese learners of Japanese were divided into two groups depending on whether the respondents were aware of the usage of the comma to indicate parallel structures in Japanese. From an educational point of view, teaching the use of punctuation in parallel structures in Japanese is the most important aspect. The conditions under which some sentences have a common topic or subject must be made clear. If punctuation is not used to indicate a parallel structure, learners must be taught how to use Japanese conjugation for this purpose.

キーワード：「分句」、クラスター分析、主題の共通性、母語の転移、過剰般化

1. 研究の端緒

学部留学生のレポートを採点しながら、佐々木が「どうしてマル（句点）を書くところにテン（読点）を打つんでしょねえ」とつぶやいた*1。「その学生、母語、中国語でしょ。韓国語の学生にそれあらへんねん。」というコメントが薄井から返ってきた。その話を聞いて「中国語の学生にあって、韓国語の学生にないなら、それは母語の干渉では？」と考え先行研究を調べたところ、水野（2000）によって日本語の句読点と中国語の「标点符号」には違いがあることがわかった。

違いがあることはわかった。ワープロで打ったレポートであれば打ち間違いも考えられる。しかし、マルを書くべきところに、明らかにテンを打っている手書きの答案を見ると、ミスではなくエラーではないかと思わざるをえない。複数の日本語教師からも同様の経験を聞き、また「何度言っても直らない」という経験を持つ教師もいた。

*1 以下、本稿では句点をマル、読点をテンと表記する。

句読点と「標点符号」の違いはわかったものの、日本語でレポートを書くレベルの学習者がなぜテンとマルを間違えるのか、なぜ何度修正しても直らないのか、なぜ母語の違いがあるのかという疑問は解消しなかった。何より、辞書形で終わる文（た形・ます形の場合もあり）が並記された複数の文は、読んでも相互の文の関係がわからず、前後関係からも推測がつかないため、レポート全体の評価にも関わる誤用はなんとかしなければと思った。

経験的に、句読点の問題は「ここはテンじゃなくてマルです」という指導だけでは不十分であることはわかっているが、何をどう指導すべきか全く見当がつかなかった。そこで、研究として取り組んでみることにした。

2. 先行研究と研究の目的

2.1 先行研究

北村（1995）は、中国語を母語とする日本語学習者の作文にみられた句読点の誤用例から、いくつかの文をひとつにする場合、日本語ではマルを使うところに、言い切りの形のままテンで接続することを指摘している。その理由として日本語の文と中国語の「文」とは概念の相違があることを指摘している。

水野（2000）は、句読点と「標点符号」の用法の比較をしている。日本語は文法上、述部が文末に来るため、次の文と境目を示すためにマルを打つ。その際、言わんとする内容が完結しなくても打つことができる。中国語は、言わんとする内容が完全な意味をなすところでマルを打つため、日本語とはマルの用法が異なることを指摘している。また、戦（2002）も同様の指摘をしている。

2.2 研究の目的

北村（1995）は誤用の原因として、文の概念の相違をあげているが、どう違うかは日中両言語の談話レベルの対照分析研究が必要であることを指摘している。水野（2000）・戦（2002）は、日中の記号の使い方の違いを詳細に述べているので、学習者の指導に役に立つ情報であるが、誤用を前にして、実際にどう指導すればいいかを考える際には役に立たない。いずれにせよ、実際に句読点の使い方の誤用に対処し、なぜ違うのか、教育現場ではどうすればいいかを具体的に示さなければ日本語教育の改善には繋がらない。

本研究では、句読点使用の正誤判断テストを作成・実施し、テストの結果を分析す

ることによって、教育現場で実際に役立つ指導案を提言することを研究の目的とする。

3. 研究方法

3.1 句読点使用の正誤判断テストの作成

句読点の使い方のルールを理解度を調べるために、正誤判断テストを作成した。正誤判断テストの作成に当たり、「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース（オンライン版）」から中国語母語話者の句読点の誤用例を収集した。また、筆者らの担当する授業で見られた句読点に関する誤用を収集した。

集めた句読点の誤用を以下の2つに分類した。分類は執筆者2名で行い、2名の分類が一致したもののみを正誤判断テストに利用した。

1. 下線部のテンをマルにする（以下、テンマル）

（誤用例）友達といっしょに遊ぶとき、まわりの人はみんなたばこを吸います、私だけ吸わないのは今ちょっと不便です。

2. 下線部のテンをマルに置き換えるだけではなく、その前の述部を活用させたり、接続助詞を補ったりする（以下、活用）

（誤用例）日本のアニメの歴史は非常に長い、1917年から徐々に発展しています。

2つの分類に基づいて正誤判断テストを作成した場合、答えは全て「適切でない」となる。2択の回答が全て同じでは、テストとして不自然で、回答者に不要な憶測を生じさせ、テストの妥当性を下げる恐れがある。テストの妥当性が下がるのを避けるため、回答が「適切である」問題を加えた。

（正用例）日本語の句読点の用法のうち「並列」を表す用例（以下、並列）

この不景気によって、内定が取り消される、派遣が打ち切られるといった問題が大きく取り上げられています。

以下に正誤判断の問題を示す。テンマル・活用の問題は下線部が不適切な部分である。丸数字は正誤判断テストでの問題番号を示す。

● テンマル

- ① 友達といっしょに遊ぶとき、まわりの人はみんなたばこを吸います、私だけ吸わないのは今ちょっと不便です。

- ④ たばこを吸うことはよく考えると、いいことはひとつもない、思い出せるのはほとんどよくない影響である。
- ⑦ 自分が悪いことをしなければ「脅迫」されないだろう、だから、それは個人の問題である。

- 活用

- ③ 日本のアニメの歴史は非常に長い、1917年から徐々に発展しています。
- ⑧ メディアの社会責任は弱者を助ける、悪者を摘発することだと思う。
- ⑨ たばこをすわないように宣伝を広めてきた、ほかの方法はありません。

- 並列

- ② 昨日行った居酒屋は、本当に何もない。唐揚げもない、枝豆もない、串かつもない、お酒は1種類しかない。
- ⑤ 私には資格がない、彼氏がいない、自慢出来るものがない、お金がない、自信がない。人生相談に来る人が決まって口にする言葉です。
- ⑥ この不景気によって、内定が取り消される、派遣が打ち切られるといった問題が大きく取り上げられています。

以上、テンマルの誤用が含まれる問題を3問、活用の誤用が含まれる問題を3問、並列の用例が含まれる問題を3問作成し、計9問をランダムに配置した正誤判断テストを作成した。

3.2 正誤判断テストの実施

学習者と母語話者を対象に3.1で述べた正誤判断テストを行った。学習者を対象とした正誤判断テストは、本学の日本語科目『日本語Ⅰ』の「レポートの書き方」の一部として行った。テストの所要時間は10分で、回収後、本論文の執筆者を含む担当教員がテストに関する誤用のタイプと正用のフィードバックを行った。

日本語母語話者を対象としたテストは、日本語教育センター開講の『日本語教師入門セミナー』の一部として行った。学習者を対象としたテストと同様、テストの所要時間は10分で、回収後、セミナー担当者が本論文の執筆者である薄井がフィードバックを行った。

3.3 対象者について

3.2で述べた学習者を対象としたテストは、『日本語Ⅰ』の履修者64名を対象に行っ

た。本研究は中国語を母語とする日本語学習者を対象としているため、64名のうち中国語母語話者42名を分析の対象とする*2。以下、中国語を母語とする日本語学習者を学習者、分析の対象とする42名を学習者群と呼ぶ。

学習者群42名の性別は、男性25名、女性16名、不明1名、年齢は10代が2名、20代が40名であった。日本語学習歴は13か月から54か月で平均31.1か月で約2年半であった（表1参照）。

表1：学習者群の学習歴

期間	13～23か月	24～35か月	36～47か月	48～54か月
人数	9	16	11	5

日本語母語話者を対象としたテストは、『日本語教師入門セミナー』受講者のうち、中国語母語話者の大学院生1名を除く27名を分析の対象とした。性別は男性6名、女性21名、年齢は10代が15名、20代が12名で、本学に在籍する学部1年生から学部4年生である。以下、日本語母語話者を単に母語話者、分析の対象とする日本語母語話者27名を母語話者群と呼ぶ。

4. 正誤判断テストの分析と考察

4.1 結果

正誤判断テストの問題を1問1点、9点満点で採点したところ、学習者群の平均点は4.79、母語話者群の平均点は7.18であった（表2参照）*3。

表2：正誤判断テストの結果

	平均点	標準偏差	人数
学習者群	4.79	1.33	42
母語話者群	7.18	1.29	27

テンマル・活用・並列（各3点満点）の分類ごとの平均点を表3に示す。学習者群はテンマルが2.06、活用が1.61、並列が1.12で、テンマルの平均点が最も高く、次いで活用、並列の順であった。母語話者群は2.81とテンマルの平均点が最も高く、活用と並列は2.19で同点だった。

*2 テストのフェイスシートで母語を「中国語・韓国語」と申告した1名も調査の対象外とした。

*3 統計処理にはR(ver.2.15.1)を用いた。欠損値は平均値で補完し、表中の数値は小数第三位を四捨五入した。

表 3 : 分類ごとの平均点と標準偏差

	テンマル	活用	並列
学習者群	2.06(1.00)	1.61(1.02)	1.12(1.06)
母語話者群	2.81(0.39)	2.19(0.79)	2.19(0.79)

4.2 2群の平均の差の検定と考察

4.2.1 帰無仮説と検定

学習者の句読点の使い方の判断と、母語話者の句読点の使い方の判断に差がないとすれば、正誤判断テストの結果の平均点に差はないはずである。

そこで「学習者群の句読点の使い方の判断と母語話者群の句読点の使い方の判断に差はない」という帰無仮説を立てた。2群の分散が等しい場合はスチューデントのt検定を、2群の分散が等しくない場合はウェルチのt検定を用いて有意差があるかどうか検定を行った。

まず、正誤判断テスト全体の平均点の差を検討する。正誤判断テスト全体の2群の分散は等しい ($F(26,41)=1.05, p=.91$) ため、スチューデントのt検定を行った。その結果、帰無仮説は棄却され ($t(67)=-7.37, p<.05$)、学習者の句読点の使い方の判断と母語話者の句読点の使い方の判断に有意な差があることがわかった。

同様に、テンマル・活用・並列の分類ごと平均点に差があるかどうかを検討した。帰無仮説は正誤判断テスト全体の場合と同様、「学習者群の句読点のテンマル・活用・並列の使い方の判断と母語話者群のその判断に差はない」である。

テンマルのデータは分散が等しくない ($F(26,41)=6.49, p<.05$) ので、ウェルチのt検定を行った。その結果、帰無仮説は棄却された ($t(57.77)=-4.32, p<.05$)。

活用のデータは分散が等しい ($F(26,41)=1.69, p=.16$) ので、スチューデントのt検定を行った。その結果、帰無仮説は棄却された ($t(67)=-2.53, p<.05$)。

並列のデータは分散が等しい ($F(26,41)=1.81, p=.11$) ので、スチューデントのt検定を行った。その結果、帰無仮説は棄却された ($t(67)=-4.49, p<.05$)。

以上の結果から、正誤判断テスト全体の回答結果について、学習者群と母語話者群に有意な差があり、正誤判断テストに含まれるテンマル・活用・並列の各分類でも、学習者群と母語話者群の判断に有意な差があることがわかった。

4.2.2 考察

4.2.1 の検定の結果、「学習者群の句読点のテンマル・活用・並列の使い方の判断と母語話者群のその判断に差はない」という帰無仮説が棄却され、学習者群と母語話者群では句読点の使い方の判断が異なることがわかった。

では、句読点の使い方の判断はどう異なるのだろうか。ひとつの原因として、中国語の句読点である「标点符号」の使い方が影響しているのではないかと考えられる。

水野 (2000)、戦 (2002) が指摘しているように、日本語ではマルで文の切れ目を表すが、中国語ではマルもコンマ (,) も文の切れ目を表すことができる。日本語では述部の終わりに必ずマルを打つが、中国語の場合、日本語でいう文と文に意味的なつながりがあるときは、コンマを用いて「分句」として文を続け、文の意味が完結したところにマルを打つ。

中国語に「分句」という単位があることを考えると、ひと口に「文」といっても、中国語の「文」と日本語の文は同じ単位とは言えない。北村 (1995) でも述べられているように、「文」といわれて学習者が思い浮かべる「文」と日本語の文の単位が違うことが、正誤判断テストの平均値の差として表れているのではないだろうか。

4.3 学習者の属性による分析と考察

4.3.1 学習者の属性と分析方法

学習者の属性によって正誤判断テストの点数に差があるかどうかを調べるために、以下の2つの観点から検討した。

1. 日本語能力

学習者群は、本学の『日本語 I』履修者である。『日本語 I』では、一年次最初にプレースメントテスト (語彙・文法・読解・作文) を行い、日本語能力によってクラスを編成している。本節では日本語能力によって正誤判断テストの点数に差があるかどうかを調べるため、「日本語能力の差によって、正誤判断テストの点数に差はない」という帰無仮説をたて、プレースメントテストの結果で分けられた上位のクラス (以下、上位群) と下位のクラス (以下、下位群) の平均の差を検定する。

2. 日本語学習歴

句読点も目標言語の習得対象であるとする、学習者の日本語学習歴と正誤判

断テストの間には相関があることが予想される。そこで日本語学習期間と正誤判断テストの点に相関があるかどうか調べる。

4.3.2 分析

上位群（10名）下位群（11名）の正誤判断テストの平均値に差があるかどうかを調べるために、t検定を行った。

上位群と下位群の分散は等しくない ($F(20,20)=0.22, p<.05$) ので、ウェルチの t 検定を行ったところ、帰無仮説は棄却されなかった ($t(18.43)=-0.01, p=.99$)。つまり上位群と下位群の正誤判断テストの平均点に有意な差はなかった。

次に、学習者群の日本語学習期間と正誤判断テストの点数に相関があるかどうかを調べるため、ピアソンの積率相関係数を求めたところ、相関係数は $r = 0.10(N=42, df=40)$ であった。また、無相関検定の結果、相関係数に有意性はなかった ($t(40)=0.62, p=.54$)。この結果から、日本語学習歴と正誤判断テストの点数に相関はないということが言える。

表 4：上位群と下位群のデータ

	平均点	標準偏差	人数
上位群	4.88	1.18	10
下位群	4.98	1.14	11

4.3.3 考察

学習者群のうち、日本語能力の上位群と下位群の平均点に差がなかったことから、句読点の使い方の判断は、日本語能力が高いからと言って正しいわけでもなく、低いからと言って間違っているわけでもないといえよう。これは、プレイスメントテストで測ることができる日本語の語彙の豊富さや文法的な知識の多さ・正確さと、句読点の使い方の判断とは異なる能力であるかもしれないことを示している。

また、日本語学習歴と正誤判断テストの点数に相関がなかったことから、句読点の使い方の判断は時間が解決してくれるものではなく、段階的・明示的に指導する必要がある項目であることを裏付ける結果といえる。

4.4 正誤判断テストのクラスター分析

これまでの分析でわかったことは、北村（1995）の主張を補うものであること、句読点の判断は段階的・明示的に指導する必要があることはわかった。しかし、これは

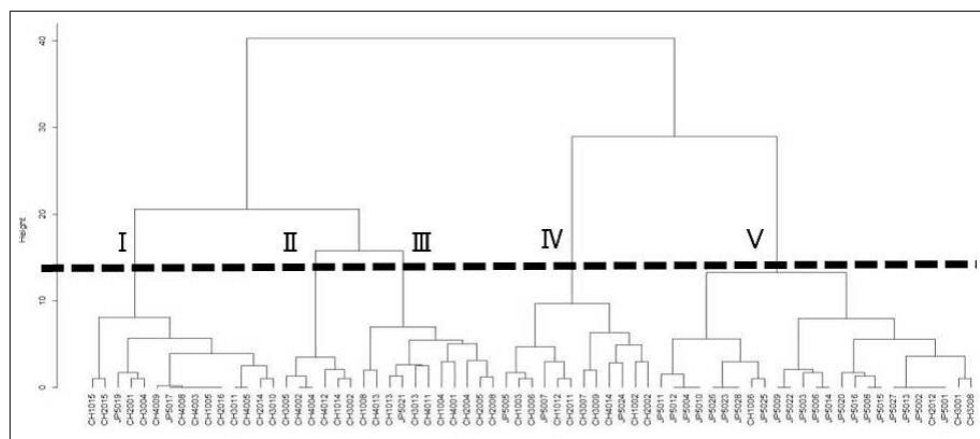


図1：回答傾向のデンドログラム

教育現場に還元できる知見とは言い難い。

句読点の用法の分類、平均値の差や学習者の属性という視点からいったん離れ、正誤判断テストの回答傾向を探るため、学習者群・母語話者群をひとつの群ととらえ、クラスター分析を行った。

図1にクラスター分析の結果を示す。図中のCHxxxxは学習者を表し、CH1xxxxは回答者が『日本語I』の1クラス(4.3.2の上位群に同じ)に属することを表す。以下同様、CH2xxxは2クラス、CH3xxxは3クラス、CH4xxxは4クラス(4.3.2の下位群に同じ)の学習者であることを表し、JP5xxxは回答者が母語話者であることを表す。

図1のクラスターを点線で5つのクラスターに切断し、クラスターごとの回答傾向を探る。

4.4.1 クラスターの解釈

図2にクラスターIの回答傾向を示す。図2の左は図1のクラスターIの部分、右の表はクラスターIの回答者の回答を示したものである。右表中の「1」は正答、「0」は不正答を表し、それ以外の値は平均値で補完された欠損値を表す(以下、同じ)。また、不正答にグレーの網掛けをした。

クラスターIの回答を見ると、テンマルと活用の用法の判断はほとんど適切だが、並列の用法の判断は適切でない。理由として、日本語のテンが句または文の並列も表せることを知らず、テンマルの誤用例だととらえていることが考えられる。

図3にクラスターIIの回答傾向を示す。クラスターIIの回答を見ると、テンマルの

		テンマル			活用			並列		
		①	④	⑦	③	⑧	⑨	②	⑤	⑥
CH1015	CH1015	0	1	0	0	1	1	0	0	0
CH2015	CH2015	0	1	0	1	1	1	0	0	0
JP5019	JP5019	1	1	1	1	0	0	0	0	1
CH2001	CH2001	1	1	1	1	1	0	0	0	0
CH3004	CH3004	1	1	1	1	0	0	0	0	0
CH4009	CH4009	1	1	1	1	1	0.7	0	0	0
JP5017	JP5017	1	1	1	1	1	1	0	0	0
CH4008	CH4008	1	1	1	1	1	1	0	0	0
CH4003	CH4003	1	1	1	1	1	1	0	0	0
CH1005	CH1005	1	1	1	1	1	1	0	0	0
CH2016	CH2016	1	1	1	1	1	1	0	0	0
CH3011	CH3011	1	1	1	1	0	1	0	0	0
CH4005	CH4005	1	1	1	1	0	1	0	0	0
CH2014	CH2014	1	1	1	0	1	1	0	0	0
CH3010	CH3010	1	1	1	0	0	1	0	0	0
問題番号		①	④	⑦	③	⑧	⑨	②	⑤	⑥

図2：クラスター I の回答傾向

用法の判断はほぼ適切だが、活用と並列の用法の判断はほとんど適切でない。

回答者は、不適切なテンで区切られた2文以上の間になんらかの解釈が成り立つ場合、テンの使い方として適切であると判断しているのではないだろうか。こうした判断は中国語の「分句」の用法、つまり、母語からの転移が考えられる。クラスター II の学習者は、日本語のテンにも中国語の「分句」と同じく文を区切る用法があると考えているか、あるいは、特に意識せずに母語のコンマの用法をそのまま日本語にも適用しているのではないだろうか。

		テンマル			活用			並列		
		①	④	⑦	③	⑧	⑨	②	⑤	⑥
CH3005	CH3005	1	1	1	0	0	1	1	0	1
CH4002	CH4002	1	1	1	0	0	1	0	0	1
CH4004	CH4004	1	1	1	0	0	1	0	0	1
CH4012	CH4012	1	1	0	0	0	0	0	0	0.5
CH1014	CH1014	1	1	0	0	0	1	1	0	1
CH3002	CH3002	1	1	0	0	0	1	0	0	1
問題番号		①	④	⑦	③	⑧	⑨	②	⑤	⑥

図3：クラスター II の回答傾向

図4にクラスター III の回答傾向を示す。

クラスター III の回答を見ると、活用の用法の判断はおおよそ適切だが、テンマルと並列の用法の判断は適切でないことが多い。しかし、よく見るとテンマルの問題①はほぼ全員の判断が適切だが、問題④の判断は全員適切でない。並列の問題②と問題⑤の判断も適切でない回答者が多く、問題⑥の判断は適不適が半々である。

	テンマル			活用			並列		
CH1008	0	0	0	1	1	1	1	1	1
CH4013	1	0	0	1	1	1	0	1	1
CH1013	1	0	0.7	0	0.4	0.7	0.4	0.3	0.5
JP5021	1	0	1	0	0	0	0	0	1
CH3013	1	0	1	1	1	0	0	0	1
CH4011	1	0	0	1	0	0.7	0	0	1
CH1004	0	0	1	1	1	1	0	0	0
CH4001	1	0	1	1	0	1	1	0	0
CH2004	1	0	0	0	0	1	0	1	0
CH2005	1	0	0	0	1	1	0	0	0
CH2008	1	0	0	1	1	1	0	0	0.5
問題番号	①	④	⑦	③	⑧	⑨	②	⑤	⑥

図4：クラスター III の回答傾向

同じ用法の問題で解答の傾向が異なるということは、回答者は作成者と異なる基準を持っていることが考えられる。そのため、正誤判断テストの問題と回答を詳しく分析する。問題①「友達といっしょに遊ぶとき、まわりの人はみんなたばこを吸います、私だけ吸わないのは今ちょっと不便です。」は、ほぼ全員の判断が適切だった。一方、問題④「たばこを吸うことはよく考えると、いいことはひとつもない、思い出せるのはほとんどよくない影響である。」は全員の判断でなかった。

問題①を適切でないで判断し、問題④を適切と判断するのは、以下のような判断基準を持っているのではないかと考える。

まず、問題①は「友達といっしょに遊ぶとき【まわりの人はみんなたばこを吸います、私だけ吸わないの】は今ちょっと不便です。」と【 】の部分为主题と解釈すれば【 】の中をテンで区切るのは適切でないという判断ができる。

次に、問題④は「いいことはひとつもない」のも「思い出せるのはよくない影響」なのもどちらも「たばこを吸うことを考える」という主題からの結論であると解釈できる。こう考えると、2つの結論が並記されていると解釈でき、適切であるという判断ができる。

問題②「昨日行った居酒屋は、本当に何も無い。唐揚げもない、枝豆もない、串かつもない、お酒は1種類しかない。」のテンの使い方の判断は、文字面だけを見て途中で「お酒は」と主題が変わっていると解釈し、適切でないという判断を下したと考えられる。

問題⑤「私には資格がない、彼氏がない、自慢できるものがない、お金がない、自信がない。人生相談に来る人が決まって口にする言葉です。」のテンの使い方の判断も同様、「資格がない私」、「彼氏がない私」、「自慢できるものがない私」、「お金が

ない私」、「自信がない私」の「私」は、全て同一人物でないと解釈できる。問題④と問題②のルールを援用すれば、同一人物でない「私」について書かれている文を並記するのは適切でないと判断できる。

問題①の文構造の解釈、問題②・④・⑤の主題・主語の解釈を学習者のルールだと考えると、クラスター III は、文構造と主題・主語の解釈について共通のルールを持つ群であると考えられる。

図 5 にクラスター IV の回答傾向を示す。

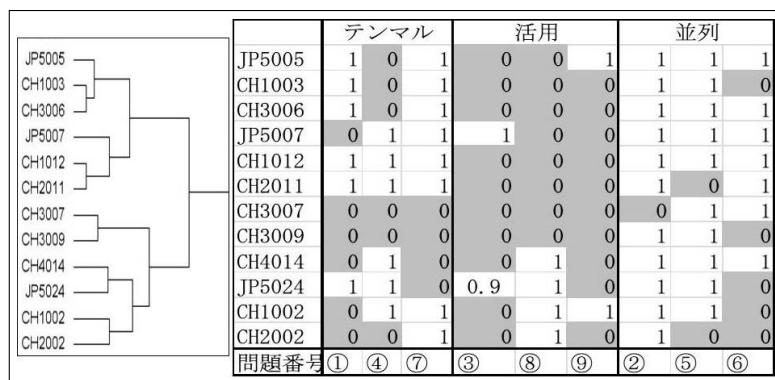


図 5 : クラスター IV の回答傾向

クラスター IV の回答を見ると、並列の用法の判断はほとんど適切であるが、活用の用法の判断はほとんど適切でなく、テンマルの用法の判断についての判断は、適不適は半々である。

並列の用法の判断はほとんど適切で、活用はほとんど適切でないということは、テンの並列に関するルールを活用にも適用しているからではないだろうか。

クラスター IV の回答者群のテンの並列に関するルールとは、共通の主題の存在、つまり問題②なら「居酒屋」、問題⑤なら「人生相談に来る人（私）」、問題⑥は非明示的であるが「『内定が取り消される』あるいは『派遣が打ち切られる』対象者」の存在が、並列のテンのルールに適うと考えているのではないだろうか。

同様に考えると、問題③の「長い」のは「日本のアニメの歴史」で、「発展している」のは「日本のアニメ」であるが、「長い」のも「発展している」のも共通の主題として「日本のアニメ」を想定し、適切だという判断を下したと考えられる。

問題⑧は「弱者を助ける」のも「悪者を摘発する」のも「メディアの社会責任」であるという解釈は適切だが、この場合、並列を表すためには「弱者を助ける こと、悪者を摘発することだと思う」と「弱者を表す」にも「こと」をつけて名詞化し、名詞

の並列とするか、「弱者を助け、悪者を摘発することだ」と思う」と「助ける」の連用形を用いて並列を表す必要がある。

問題⑨は「たばこをすわないよう」を共通の主題として想定していると解釈できる。しかし、その場合は「たばこをすわないように宣伝を広めて行く以外、ほかの方法はありません。」のように、「ほかの」に先行するマーカー、ここでは「以外」を補わないと前後関係がわからない文になってしまう。

以上のように、クラスター IV はテンの並列に関するルールとして、共通の主題を想定しているが、ルールの適用範囲を広げすぎて過剰般化を起こし、活用の用法の判断がほとんど適切でない群となったと考えられる。

図 6 にクラスター V の回答傾向を示す。

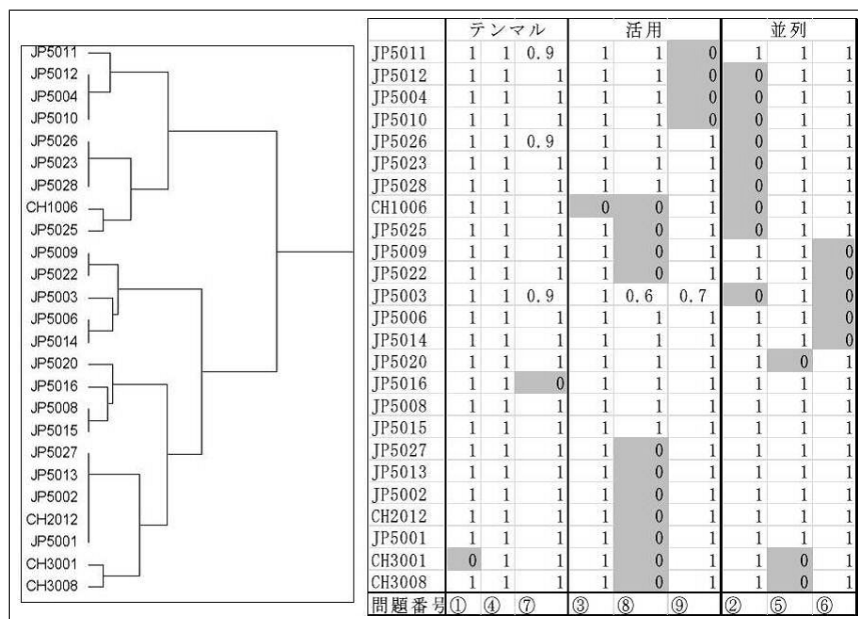


図 6 : クラスター V の回答傾向

クラスター V の回答を見ると、テンマル・活用・並列のどの用法の判断もほとんど適切で、母語話者群のほとんどがこのクラスターに属している。ただし、活用の問題⑧・⑨、並列の問題②・⑥の判断が適切でない回答者もいる。そのほとんどが母語話者であることから、正誤判断の問題そのものに他の解釈を許す余地があったと考えられる。母語話者が一意に解釈できない正誤判断の問題を学習者に判断させるのはテストとして適当ではない。この点については、今後の課題としたい。

4.4.2 クラスタ間の比較

クラスタを大きくしていくと、つまり図1の点線を上に移動していくと、まずクラスタIIとIIIが結合する。クラスタIIは活用の判断、クラスタIIIはテンマルの判断が適切でないという点で異り、並列の用法の判断が適切でないという共通点がある。次に結合するクラスタは、クラスタIとクラスタII・IIIである。IとII・IIIの共通点は、先ほどと同じく並列の用法の判断が適切でないことが挙げられる。しかし、クラスタIはテンマル・活用の用法の判断がほぼ適切である点が、クラスタII・IIIと異なっている。

その次に結合するクラスタは、クラスタIVとクラスタVである。クラスタVにはほとんどの母語話者が属している。両者とも並列の用法の判断がほぼ適切であるという点が共通している。

そして、最終的にクラスタI・II・IIIとクラスタIV・Vが結合する。両者を分けるのは並列の用法の判断で、クラスタI・II・IIIは適切でなく、クラスタIV・Vは適切である。

4.5 指導への提言

クラスタの解釈とクラスタ間の比較から、並列の用法の判断が適切か適切でないかによって、学習者群と母語話者群が分かれていることがわかった。また、クラスタIIIとクラスタIVの解釈から、文の主題の共通性の判断が活用と並列の用法の適切さの判断に影響を与えていると考えられる。

指導案としては、まず、日本語のテンの並列の用法を提示し、文の主題の共通性を判断させながら、どんなときにテンが並列を表すことができ（問題②・⑤・⑥）、どんなときは表せないか（問題③・⑧・⑨）を考える活動が有効ではないだろうか。

そして、問題③・⑧・⑨のような文を読み手に理解してもらうためには、どう書かかを指導することが重要だと考える。

5. まとめと今後の課題

日本語教師、とりわけ中国語に明るくないネイティブの教師の中には「マルは文末に書きます」という指導のみで終わらせていることはないだろうか。ひょっとしたら、句読点に関して明示的に言及することさえないかもしれない。ましてや、中国語の「文」と日本語の文の概念が違うことも知らずにいるかもしれない。

一方、学習者の立場から考えると、ある程度まとまった長さの文章を書くのは初級後半あるいは中級になってからで、長い文を書かなければテンマルの使い方を間違えることもないし、テンマルの使い方について指導を受けることもないだろう。

まとまった長さの文章を書くようになってからだと、語彙の選択・文法の適切さ・表現と意図との不一致・表記など指導すべき項目が多岐にわたり、テンマルは「何となく変で、いつも直しているけど直らない」問題として置き忘れられてしまうのではないだろうか。しかし、アカデミック・ジャパニーズで「何となく変」なまま、中国語の「分句」のルールをそのまま日本語にあてはめると、読み手に文の接続が理解されず意味が伝わらなかつたり、全体としてまとまりがないと評価される恐れもある。これは学習者にとって大きなマイナスとなるため、段階的・効果的な指導を考えなければならない。そして、4.5 で述べたような指導を行うためには、学習者の句読点の使用に関する誤用例を採集し、書いた本人はどのような判断基準でその文をよしとしたか、質的なインタビューを行い、用例を増やしていく必要がある。

参考文献

- 北村よう (1995) 「中国語話者の作文における文接続の問題点」『東海大学紀要留学生センター』 15,1-11
- 水野麗子 (2000) 「中国語と日本語における「句読点」の対比」『明治学院大学外国語教育研究所紀要』 10,81-97
- R Development Core Team (2005) R: A language and environment for statistical computing, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.
URL <http://www.R-project.org>
- 戦慶勝 (2002) 「中日両語における句読点の照らし合わせ」『国際文化学部論集』 3(2), 69-77, 鹿児島国際大学国際文化学部
- 山川史 (2010) 「日本語学習者の作文における句読点」『流通経済大学流通情報学部紀要』 14(2),63-79

謝辞

本稿は、2012年7月26日に本学で行われた第10回関西学院大学日本語教育研究会で発表した内容をもとに加筆・修正したものです。研究会において多くの有益なコメントをいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。